

築地 フア ホテル

Shouda Kan

翔田寛





講談社文庫

築地ファントムホテル

翔田 寛

講談社

著者|翔田 寛 1958年東京都生まれ。2000年「影踏み鬼」で第22回小説推理新人賞を受賞し、作家デビュー。'08年『誘拐児』（講談社文庫）で第54回江戸川乱歩賞を受賞し、単行本と併せて15万部を超える大ヒットとなる。ミステリーと時代小説の両ジャンルで健筆をふるっており、'14年「墓石の呼ぶ声」^{ほせき}（講談社『デッド・オア・アライヴ』所収）が第67回日本推理作家協会賞短編部門候補となった。他の著書に、『参議暗殺』（『参議怪死ス』より改題）『影踏み鬼』（ともに双葉文庫）、『逃亡戦犯』（講談社文庫、『祖国なき忠誠』より改題）、『過去を盗んだ男』（幻冬舎文庫、『無宿島』より改題）、『やわら侍』シリーズ（小学館文庫）などがある。近著は『探偵工女 富岡製糸場の密室』（講談社）。

つきじ
築地ファントムホテル

しょうだ かん
翔田 寛

© Kan Shouda 2014

2014年8月12日第1刷発行



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——大日本印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277894-7

目次

プロローグ	9
第一部	17
第二部	247
エピローグ	390
解説 佳多山大地	398



講談社文庫

築地ファントムホテル

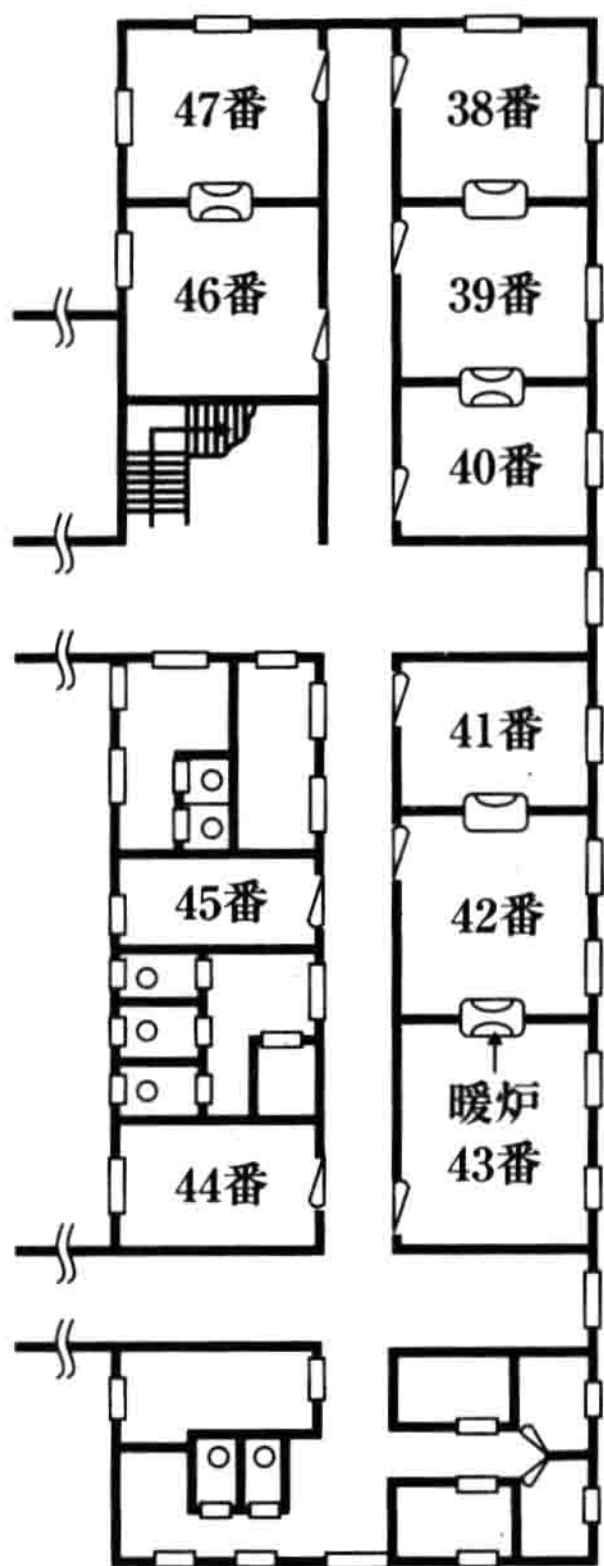
翔田 寛

講談社

目次

プロローグ	9
第一部	17
第二部	247
エピローグ	390
解説 佳多山大地	398

築地ファントムホテル



◀左上

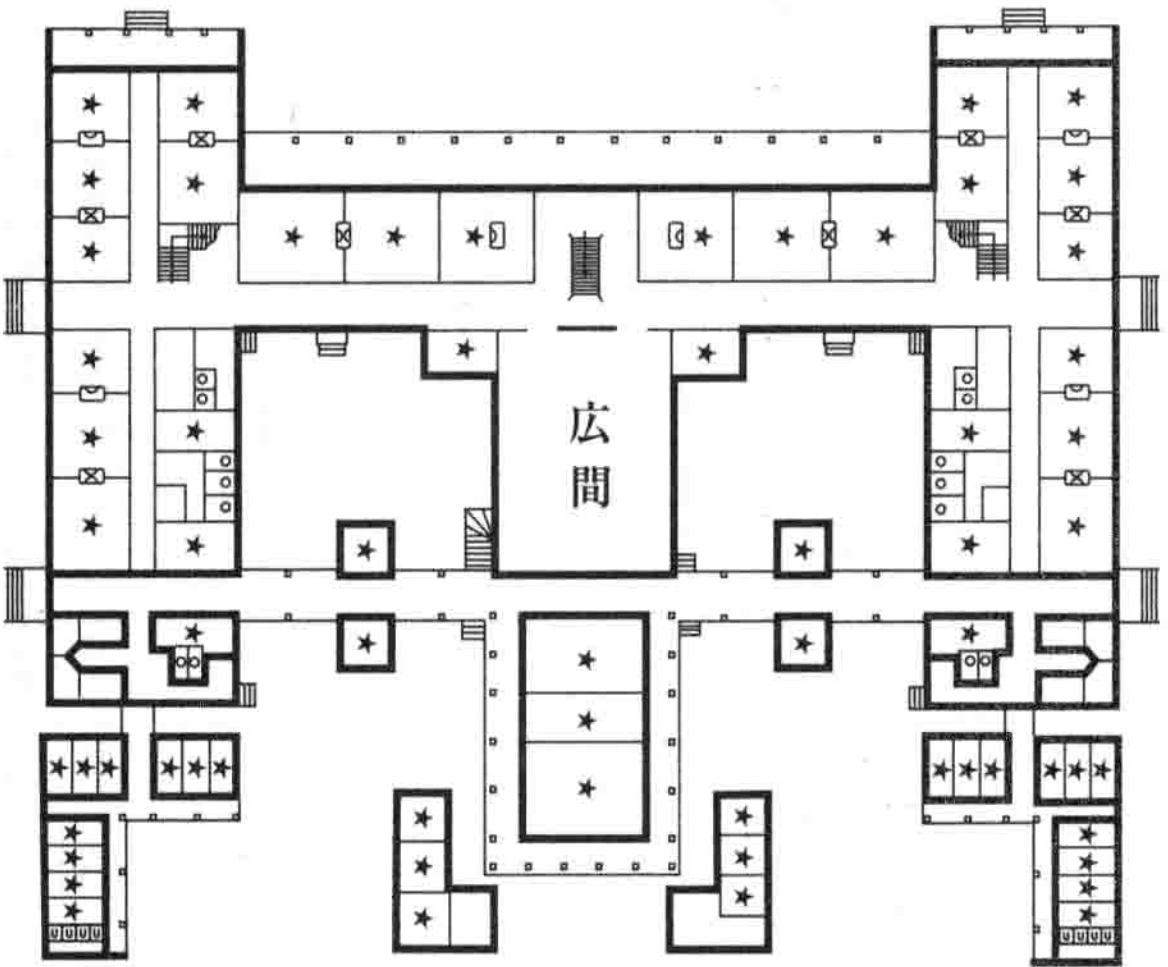
「東都築地ホテル館之図
明治初期」(歌川広重画／
東京都中央区立京橋図書
館所蔵)

◀左下

「築地ホテル館 1 階平面
図」(堀越三郎著『明治初
期の洋風建築』より) 一
部簡略化し、★は客室を
表す。

◀右

「築地ホテル館 2 階平面
図 (右翼のみ)」上記 1 階
平面図を元に推定。部屋
番号は本書著者による。



プロローグ

明治五（一八七二）年、陰曆二月二十六日（陽曆四月三日）。

揺れるような感覚が、体全体を包んでいた。

遙か遠くで、潮騒しおさいのような音も微かすかに響いている。

長い船旅で、ずっと波に揺られてきたせいだろう――。

アーサー・モリスはベッドで寝がえりをうちながら、まどろみの中で思った。彼はいわゆる《御雇い外国人》だ。日本の大学の工学教師として、日本政府から招しょう聘へいされたのである。

モリスがイギリスのサザンプトンから乗船したのは、インダス号だった。その船でアレクサンドリアまで行き、そこから駱駝らくだの背にゆられて砂まみれになりながら酷熱

の土地を踏破して、スエズ港でエリン号に乗船した。この船は千トンもある蒸気船だったから、航海の出だしこそ快適だったものの、インド洋の茹^うだるような蒸し暑さと、途中で寄港した上海の蚊の来襲には辟易^{へきえき}したものだだった。

そして、香港でペニンスラー・アンド・オリエンタル社のアゾフ号に乗り換えて長崎へ到着し、そこから国内の船便で今日やつとこの東京へたどり着いたのである。

長旅からようやく解放されて、ゆっくり眠れると思うと、モリスは無上の喜びを感じずにはいられなかった。この築地ホテルのベッドの柔らかさや、シーツの清潔さも悪くない。午後八時に客室のランプを早々と消してベッドに入ったのも、旅の疲れが嫌というほど溜^{ため}まっていたからだ。

体がふたたび揺れて、壁に何かがぶち当たるような鈍い衝撃を感じた。一瞬、隣室で宿泊客同士が喧嘩^{けんか}でもしているのかと考えたものの、どうでもいいかと思ひ直して枕に顔を埋めた。

叫び声が響いたのは、そのときだった。はっと目を開けたモリスは、息が止まった。窓のブラインドの隙間^{すきま}から糸のような光の筋が漏^もれて、瞬^{またた}くように揺らめいている。

火事——。

そう悟るのと、潮騒と思つたものが人々の騒ぎ声だと気付いたのは同時だった。
「火事だ」

モリスは思わず叫ぶと、サイド・テーブルに置いてあつた眼鏡を掴み、慌ててベッドから飛び起きた。その途端に、右脚の脛に激痛が走つた。ベッド脇に置いてあつた大きなトランクに躓いたのだつた。床に這いつくばつたモリスは苦痛に顔を歪めて、この上なく恐慌を来してゐた。大事な眼鏡を落としてしまつたのだ。彼はひどい近眼で、眼鏡がなければ目が見えないのと同じである。

狂つたように手探りする。悲鳴や騒ぎがますます激しくなる。カン、カン、カンという鐘を連打する耳障りな音が、いつそう不安を駆り立てる。どうして日本へなど来てしまつたのだろう。泣き出したい気持と怒りが込み上げてくる。

モリスは己の選択を呪つた。日本政府が提示した教師としての報酬は、イギリスの相場の数倍だった。そのうえ、住む家や身の回りの世話をする人の手配も、大学持ちという破格の条件だった。だから、四年間の契約期間を終えて故郷のサウスケンジントンへ戻つたときには、広い屋敷を購入することなど造作もないという目論見だった。

その日本滞在の初っ端に火事に遭うとは、何という不運だろう。齒噛みしながら、

猿みたいな顔に笑みを浮かべて、勧誘の言葉をかけてきた日本の大使を恨んだ。しかし、次に脳裏に浮かんだのは、ライザの澄まし顔だった。

モリスより十歳若い二十五歳のライザは、知人のパーティーで初対面の彼がケンブリッジ出の研究者だと知ると、最初から気を引くような素振りを見せたものだった。そのくせ、食事に誘ったり、観劇に招待したりして肝心な場面になると、彼の求愛を巧みにはぐらかしたのだ。そんな態度にいつそう想いを掻き立てられて、モリスは昨年のクリスマス・イブについて求婚したのだった。すると、ライザは困ったような笑みを浮かべて、事もなげにこう言ったのである。

《お言葉はとても嬉しいわ。でもね、アーサー、あなたの住んでいらっしゃる狭いアパートで新婚生活を送るなんて、私にはとても考えられませんもの》

その半月後、ライザがオックスフォード出の若い学者と婚約を交わしたことを知り、両天秤にかけられていたことに思い至ったのである。しかも、その男がロンドン郊外に親譲りの豪壮な屋敷を構えているということも耳にした。あの失恋こそが、今回の日本行きを決意させた原因と言えるだろう。もしもいま、目の前にライザがいたら、絶対に締め殺してやる。

そのとき手に触れたものがあつた。

眼鏡だ――。

掴むと、すぐに顔に掛けた。途端に背中に冷汗が流れた。左側の蔓が折れていて、手で押さえなければ使いものにならない。それでも、眼鏡を通して薄暗い客室内がどうにか把握できる。片手で眼鏡を押さえたままドアへ駆け寄ると、モリスは夢中で廊下へ飛び出した。

廊下にはランプの淡い光が点々と灯っていた。遠くで人が駆け回る騒がしい音が響き、階下から無数の叫び声が聞こえてくる。そのくせ、左右に並んだ客室の扉は閉じられたままだ。

右脚の痛みに顔をしかめたまま廊下を歩きたびに、目の前の光景がぶれる。一瞬だけ足を止める。トランクを取りに戻るべきだろうか。いや、そんなことをしている場合ではない。そう思い直したとき、斜め右前の客室から声がした。だが、空耳と思いい、行こうとした。

「ヘルプ・ミー」

今度こそ、呻き声^{うめ}が聞こえた。ドアに目を向ける。四十六番の客室だ。一瞬の逡巡^{じゆん}の後、モリスはドアのノブに手を掛けた。ノブは回り、無理に押すと一インチ（約二・五センチ）ほどは開く。だが、それ以上は開かない。ドアに何かが押しつけ